大地

9号
S57. 2. 10
真宗大谷派
浄国寺(23)5724

一瞬を大切に

富岡　笠原　真

五十五年一月、積雪の五十糎もあったろうか。お昼に突然乍ら、木の香も新しい庫裡の玄関を訪れたところ、丁度、先のお住職が元気で茶の間の炬燵に居られ、お壮健のお喜びを申し上げ、

実は先々代の五十回忌と、良く働いてくれた母の十三回忌に当り新しく仏壇を求めたく、相談に上りました。何れの仏壇屋がよろしきか！家風に合ったのを、お心配願い度い旨申し上げたところ、早速お引き受け下され、寒中ではあったが、足早に店に参られ、種々筆談され指示下さって、自分もお住職に従い契約致しました。流石はお住職のお徳の致すところ、深く感動致しました。

三月十三日入仏式、同月十六日法要を営み読経も終えて一服して頂いて居る間にも親類の方と筆談され、又、仏具・法名・供物の置場等々、夫々指示、お教え頂き、今更乍ら年甲斐も無く無知なことに恥かしくなりました。お住職にはその間、終始笑顔を浮べ乍ら満足そうな喜びは一通りではありませんでした。

あゝ！やはり今年求めて良かったなあ！と、その時くらい幸せを感じたことはありません。毎日、仏壇の前に座す毎にその時のことを思い出しては、忘れ得ぬ日をまぶたに浮べ、合掌致しております。

昨今の生活は駈け足で過ぎていくような気が致します。

せめて朝だけでも、仏壇に挨拶し、合掌の一瞬、一瞬を大切に致し、笑顔であいさつできるような、充実した生活をめざして歩まなければならないと、しみじみ反省させられた。

(註) 笠原氏は富岡の人、現在酒販売業を営んでおられる。性格は穏かで何時も微笑を絶やされない。しかし筋を通す心の強い人でもあられる。富岡地区の壇徒世話人をつとめられ又浄国寺護持会の運営にも中心となってお骨折いただいている。信の厚い真面目な方。

日記から

四十九年九月

山崎　武雄

午前十時十分、慎子、英二等新婚夫婦に見送られ、睦、隆昌と共に中央病院に来る。隆昌、入院の交渉をしてくれ、二階外科二三〇号室に入る。

入室の途中、中村外科部長に会う。肩を叩き無言の中に任せてくれとの意をこめられ信頼の度を増す。

二三〇号室は二階の一番西側にあり、四人同室。

何となく落ち着かず、併しこれより二ケ月、始めての生活を予想し一寸心はずむ。

大滝看護婦より、今迄の病気の事を細かに聞かれ、体温、血圧等をはかる。

病院の昼食、夕食を食う。おいしく残さず食う。まずいと言う人もあれど、自分としては食事は待ち遠しく楽しい。

二ケ月の間に本を読むこととし、先ず「安曇野」の一巻から読む。なかなか面白し。

(註) 四十九年の発病後から書き始められた前住職の日記は、かなりの量にのぼりますが、その中から随時掲載してみたいと思います。

今年は全く雪が降らない。豪雪地帯で鳴る此の地にあって、一尺にも満たない積雪量で大寒を迎へることは、何か気持ちの悪いような気さえ起こる。この後想像もつかぬ、ど偉い事があるのじゃないかしらと余計な心配をしてしまう。我ながら情無し、情無し。しかし今年のような雪の無い冬を経験すると、今さらながら雪国越後の人々にとって『雪』のさしひびきが根深く大きいことを改めて知らされる。

祖父隆英（前々住職）は昭和二十五年に他界した。今年は三十三回忌にあたる。随分酒を飲んだ人で酒上の話には事欠かない。この祖父は酒落た籐椅子を愛用していたという。（僕には寝た切りの祖父より記憶がなく写真により想像するのみ）。その籐椅子で小さい頃よく遊んだ。遊びの中で椅子はバスになり、船になり、大邸宅になり、山にさえなった。古い想いは出ばなしは粉飾美化されがちだがそれでも子供の頃の無限に拡がる空想の世界を懐しく想い出す。籐椅子は子供らの成長と共に毀れてしまった。

三十余年経ち、籐椅子と戯れて居た頃と、今日あと二年で四十才（不惑とは恐れ入る）になる自分との擊りを思う時慄然とする。

掌に　小虫をのせ　あるかせる
その急ぎ足を　かなしむ
人生に似ている　（高見順）

掌上の小虫の歩みに人生の悲しみを覗るほどの感性は僕にはない。しかし今、自からの三十余年の時時の事を両の手で掬おうとする時掌に残るものは何かしらと首をかしげてしまう不確さにたまらない思いがするのだ。その時その時は、

遊動円木の生活

山崎隆昌

自分なりに手深り歩を進めてきた気ではあったが、今振り返れば、逃がしてはならない幾つかの事が指の間からパラパラともれ落ちてしまっている。

丸太を自由に動くように地上に低くつり下げた遊動円木という運動用具がある。太い丸太が前後左右に揺れ動き、バランスを取り落ちないようにするものである。仕掛の簡単なこの運動具は子供が大好きである。面白くも何もないことだが、僕のチョボチョボとした生活が、この遊動円木に思えてくる。生活という丸太にしがみついて、右に左に揺れながら必死にバランスをとって来たし、今も又、丸太の上でフラフラしてつかまっている様を思うのだ。今年の真宗門徒ごよみのはじめに次の言葉がある。

「生活は豊かになってきた今日、かえって生活そのものに充実感がなくなってきたというのがいつわざる実感のようであります。これは生活が本当に大地に根づいていないからでしょう。

真宗の聞徒は、その根を聞法によって培ってきたのであります」

生活が大地に根づくということは〝言葉〟の表現として分るけれども、自分の実体験として様にならない。実際の毎日の生活は、いつも見えや金や因習などという太い綱につられた丸太の上に揺れている。遊動円木の綱を断ち、丸太を大地に根づかせるには聞法によってせよと教えられる。

宗祖親鸞は京の都より雪深いこの地に来られ、大地にその両の足を下された。その一生は聞法、聞思の御一生であられたという。現生きる私には意味が深い。

仏は常にいませども

山崎　睦

仏は常にいませども
　うつつならめぞ衰れなる
人の音せぬ暁に
　ほのかに夢に見え給ふ
（梁塵秘抄）

これは昨年亡くなりました住職が病の床に付き、苦しさの最高の時に色紙に書いたものです。両足は丸太の様にむくみ、自分の力で自分をどうすることも出来ない状態でした。しかし一日中床の上に起き背もたれに寄りかかって静かに色紙を書いたり、随筆の様なものを書き続け、一日一日を大切にしているように見えました。先の歌を、常に味わって居たのではないかと思われます。生き続けることを捨てず、毎日、一生懸命生きている姿に尊いものさえ感じました。

生きられるだけは生きよう
草燃ゆる　　種田山頭火

時々この句を口にして居りました。自分の病を知ってからは、常にそのように考えていたようです。七十年をせい一ぱい生き、五月二十三日、静かに旅立って行きました。

先年、母が亡くなりました時、その兄上でもあられた金子大栄先生は「悲しくはないが、さびしい」と仰せられましたが、今、その言葉を深くかみしめております。

煙

山崎　慎子

火葬場の近くに用事があった。いつもはいっぱいの駐車場が、その日はたまたま一台の駐車もなく煩うことなく車を止めることができて、ホッとした私の目にとびこんで来たのは、火葬場の煙突である。しかもその煙突からは茶色を帯びた黒い煙が吐き出されていた。訪ねたアパートは、火葬場のま横に位置していたのだ。

父の生前は、煙のあがっているその煙突を見ても、特別の感興をもよおすことはなかった。まるっきり他人事として、あゝ誰かが亡くなった――と、むしろ乾いた感じ方さえしていたのに、この日はさすが不意をつかれ、胸をつかれた。父がみまかってから半年が過ぎていた。

「夢中」で暮したお葬式の前後は、実は「夢」などではなく、さめて見れば確かな「現実」であった。戸籍からも父の名前は抹消され、冢のどこを探しても、その姿はない。ただ、家族や縁ある人々の心のそれぞれに生き続けているだけである。

そして、心に生きているというそれさえ、言ってみれば肉体が滅びたという証しに他ならないだろう。

今でも、あの日の火葬場の釜の音をはっきりと思い出すことができる。ちようど友引きで、他には来る人のいない火葬場はその日、父が唯一人の客であった。父の棺を入れると点火が始まり、点火と同時にゴオーッという音がうねりをあげたのだ。

中学生の甥が外に出て、煙を見て来たとポツリと告げたが、見に行く気にはなれなかった。

もくもくと吐き出される褐色の煙は、風に運ばれて天空に吸いこまれて行く。

あの日、父を焼いた煙もやはり、こんな色をして、こんな風に、風に運ばれて行ったのだろうか。

祖父の思い出

西山国雄

祖父が逝去してから、早半年が過ぎた。

最初の一ヶ月は、気が動転して収捨がつかなかった。しかし半年たち八ヶ月も過ぎた今が、一番悲しみが大きい。心にポッカリと穴があき、大きな支えを失なったような気がする。

私が物心ついた頃は、祖父は既に声を失なっていた。だからどんな声だったかなどはぼんやりとしか覚えていない。

しかし私は決して悲観はしない。こんなことを言うと生意気なようだが、声を失なったことによって祖父の人生観に一層磨きがかけられたような気がする。先にも述べたように、私は声を失う前の祖父を全くしらない。だが、声が出ないという不自由な分だけ、何か素晴らしいものを得られたようであった。

それに、声で表現するよりも、書いて表現する方が数段説得力があったような気がする。

私は、よく祖父から筆談でいろいろなことを習ったが、紙に書く一字一字が、本当の重みのある、有難い言葉のように感じられた。

私は祖父のそのするどい人生観で、人間として生きていく上で大切なことを、たくさん教えてもらった。

その中で、「水栽培の芽の出んとする時、根すでに深し」というのがある。

芽より根が先に出るというのは、誰でも知っているだろうが、それを何かを成す時には、〝しっかりと基礎を固めろ〟というニュアンスを秘めて、非常に意味深い言葉で教えてくれた。

あの時の感銘は忘れられない。

その他、「深い深い穴を掘るには、表面から小さく掘っても、脇から崩れて来てうまく掘れない。やはり表面から大きく、深く掘るべきだ」というのも教えて頂いた。

このような祖父と、この世で十五年近くも一諸に暮せたことを、とても幸せに思い、また誇りにも思っている。

先に挙げた言葉は、自分の生涯の鉄則として、守っていくつもりである。

(註) 西山国雄君は亡くなった前住職の二人目の孫。現在城東中学三年生で高校受験の勉強のあい間に快く寄稿してくれた。九人の孫の中で年令的にも、又感受性の上からも、最も深く故人と関ったことは、文章からもよくうかがい知ることができる。生意気盛りのニキビ面の男の子が、故人の前では神妙にかしこまっていた姿をあざやかに思い出すことができる。

あとがき

越後には珍らしく穏やかな暖たかい新年を迎えました。今は二月。遅い雪にあわてたり、反面ホッとしながら、ようやく第九号をお届けします。今回も又、期せずして前住職追悼号といった趣になりました。今更のようにその人間的な魅力、影響力に目を見はります。そういった意味でも故人のものの見方や考え方、又、生活態度を知るひとつの手がかりとするべく残された日記の中から、少しづつではありますが掲載していこうと思います。

今回は四十九年九月下旬の入院の日の記録です。故人にとっては生れて初めての入院でありました。又、文中、英二等新夫婦とあるのは同年九月十五日結婚したばかりの次男夫婦のことです。

寒さの折、御身体おいとい下さい。

(慎子)